環海異聞

拾三

H013

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

DK
18
.087
1807
RARE
No. 13

1909407

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

環海異聞巻之拾三

帰朝洋中之記

翌ツ子之年 文化元年 甲子 四月下旬ニルケイサと云
島辺ニ船かゝる事
ニルケイスケとも彼人いよひし様ニ覚由
カナスタより里此処迄千里ニ成十六合セ為る
里数なりといへる事 海路記ニ桜ニ此し南
へ差船する度彼五月廿四日家ニ四月十五
日とりて漂家四月下旬と覚へし
ハ和遠なり

上 武笠 瀬崎

此島の近処に又六七島もあるといふ船中が
いふへず此しに海流深く浪あらき所なる船乃
人々も此しに海ハ始くの根子なく湊口も尋ね也
漸く一湊ありて船ハ泊む船中ニなく語
しハ此島人ハ云く容貌恰も鬼神乃
ごとく男めともに裸體(ニツハダカ)前陰も老々あらはし居る
地なるとこ女向ふの演迎ありしに果して
裸(ハダカ)来る男めこ四人りて其報免逞(タシマ)しく男の丈
七尺餘西より想ひ身足のもしこ近敵ニの入墨
ありし陽物ありし但し先々の皮ありし引
のばし糸のかきこの物行く結ひたる女ハ丈ケ五尺程もあり

入墨ハ手先ニ斗リあり前ハ薄(スキ)しゝ出ゝ或草の葉
なり少し連なる物を以て蚕ハ下け覆ひ細て緩ニ結ひ
止むなり私湊へ入るなりて男女共に海へ飛込ミ永
へ迫寄り来る変魚の泳くかてくまく何かしの
ふく強かしく本私なり見物の根子所を追ニ島中
の男女鶏しく泳(ヲヨギ)きつけ来り生椰子 此等ニて鶏しく椰樹なり
又ハ鯉 鯉ハ沖ニ居る魚より様し 魚を持来るなり
なと手ニ持来りて生肉
ニ髑髏(カレコヲベ)なきけ来る所を又ハ小児を脊負ふ
泳き来るも見る潮くに二三百人程も及り
皆しこれ皆物を望む神なり此所ハ金鉄の産
せざる地なりか然しこれ根子なり オロシア人

傳へ聞し居る根子まで既に水樽の族（カナタカ）花
のを取水なる物を先達て鍛（ジ）治に断せ
切らせ亦その物なる所を是を 闕文 程いくおしらへ
りの鮭尾と交易しく族を手にさけ
くおよき鳴をいかになる跡重を得しくく悦
ふ根子所を志方里に是を貪らんとし一私に
ひかしらん（コト）ことを重む誠にく男女立夜勤しく
永を為にむらかを集を強しくいまんかなし
私方のことの是を置り制せんと志るを
使者さしと見君者なりとする此當人
如何の事を仕おさんもさかをかなしとく

穏便ニ云扱ハせる事ニ用ゐを増しかへん為此所
へ舟を蒙せしに右ニ詠ゝ中ニ贊謚（シヨウタン）拭合ニ
も及ひかたく甚迷惑しなり一々彼国の私
ゝ両人本船へこき付し者所謂是嘗人といこと
なるを両人共にそゞかゝく而ゝこゝへたかを入墨
し頭ハ四髪ゝ唐人のゝく内ゟ布（内ゟハ末の皮也仙臺の方云なり）
ごとくきゝの我犢裏褌（シタヲビ）ニ志なり此両人本船乃
カベタンへ出付を仰ゝ申る事我ニ吉人事アギ
ケリ国一人ハハランソースケ國乃ゝの事十余
年ニ前此嘗へ漂着し帰る届きる事
も仰ゝり日を送し内嘗主の女婿（ムコ）と事

今無事に永住致すこと無く仮初此二人の言の
オロシヤ辞も通致す趣ニ候得ども両国のことを
文字も無く居るゆへくるれ無かりしま容子も知
たり一夜両人エカヘタン江頼ミ申けるハ本ニ私共営
まく薪水も増し入夜私共与せしまゝ若ニ私
共く介営人ニ私の左右前後へ昼夜ともに纏ひ
むつかしき事も有之やうなるもとも会得只を見
くしくけるにく共れしるささまくかいま見
ある何卒薪ニ銭返返け薪水
銭営しを求めるさとを銭とらてるかはしくれよ
かく云ひけれ一彼の両人の営く女人終ニ私

へ行けば訴ふるに水夫ホをしく奸婬せし先
いきうそのをなへ以て左あらハ人氣利しよ何ぞも
自由なる風しとおへさりし此云葉に随ひ
侯爵ハ志じ思報とく上役乃者ゑ之水夫
共に同通し教のことく一応扱いせ一生貸
としく誤箱(ニツタガ)の割れかしいく所しせ者
れハ大ひに祝ひ持帰り多里これ方男女ハ給
屋まじおく一私の者へ手傳陸を望水ホ我運
將しかるとしかるなる望思大ひなる桶を湛(タ)へ
多るの此方の人二三人にて運ひ乃ちその
我爲人ハ一人にてかきけ乃進多里一生力量

まかり居る居きや

一 彼半裁くし南人の者に出しきれ下帯を
謝礼としてて送れり

一 レサノツトハ上陸し謝義としてて鴻主一も出
會のよし又金なき誠を謝礼としてて送れり
かねて用ゐせしとみへたり彼より無家を
返礼しなり

一 鴻主ハ為て(イタツテ)忠しき者のよし昔ハ此鴻人生
きなる人をも食す今無死人のミ食ひ親族といへ
とも撰ハ後となる土地に椰子(ヤシ)多く専し是を食
ひといふ

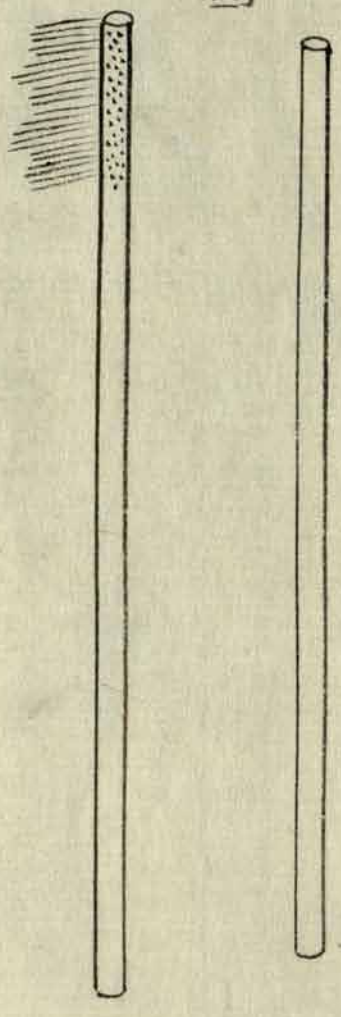
一 鴻之門ニ居ル家といふことの別ニ能く岩の挾間なるべ
ま居ると夢用

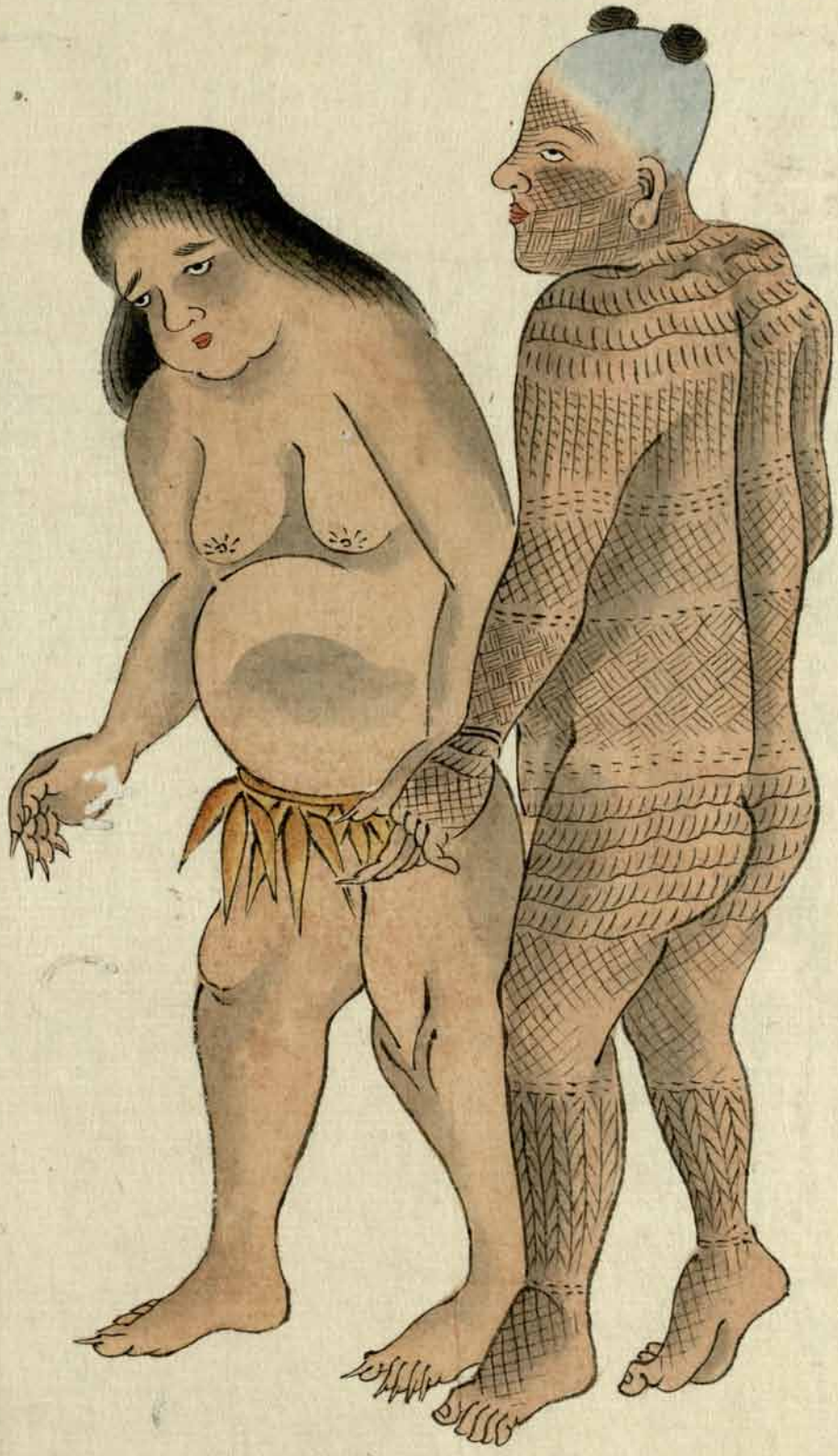
一 柄のまゝ奥骨を以て製し其毛なるべき
い奥刺を植まる物何里是を以て想身を敗物
をなし只ひくの様根なる所面ニ至手足乃
えしく近のける所なく但し額の両角小髪を
のけし深き裕重なしとふくみれ無角れ
まゝしきく水夫の門ニ諸之ニ嘗人を雇ひ
うでく文字をかきて敗しせまるに槌のごとま
ことの何里く右之筈を牙の上に何く槌を持
ちくきの身血あれ無手中ことふさとまく

日を始き又日をく間も仰ぐ方来上水をむす
際なる事なれ其文字ハヲロシヤ文字なく
何率何月翼の氏島に来りしといふ事
を聞くせしとなり

此書にハ元より文字なし
とさすり

黥墨圖





一 湾の廣サ何程あるやしらず追ゐ此湾出船一度
夜もしらず其翌日の巳時比さらず思さしあ余程
大いなる嶋とみへ多くは島の内に高山もすゝ
一 島の船は大材の中はくばめ多く船なりは大舵
の船は象る艤先蛇尻舳は丸木は彫りは尾乃
形はなし細長く倒に様子なりはまあらやあ
猿へ付けるのみなりは左の図のこせし

ニルケイサ島
船ノ圖

一 如此処世界の中多きくなしとも云所ゝ
と云所の人こいへ是皆得人なセイカ〳〵と云多
鬼人と云事なり

一 枚白帝留所しきく此処なり發行
桜に此ニルケイサハ南亜墨利加の西なる
蓬洋にある土地温熱の一小島なり
昔時ハ欧邏巴洲の人といへとも通所せを
るとすへ世界旧図にする処なし近
来拂郎豪國新製世界
図に是を知也しし此度ハ
来乃テロシヤ板世界図にも

出候但し其処を拂(フ)郎(ラン)豪(ズ)製の図と校
すれハ十度の多うひあり拂良豪図ハ
こゝ〳〵正と寸尾しと問氏いへり又曰洋
中航路の標的とす処なるあかるぐれ
航ハらせしとゝ由

五月二日の頃　ニルケイサ出船

海路記ハ拠るに此し両に航ハ繋ること日数
十二日にして彼六月六日我四月廿九日
船帆とゝ由漂客勝記ハ処の船ハ
日ハ二三日の多うひあり
是今大低東へ向ひしし船る様ニ見ゆ

又世界の志中へ出しとく私の中初の
如く漁家抜なしく祝義しり望

ニルケイサ發帆以後海路記

彼六月七日　我四月廿九日　彼六月八日　我五月一日
〃同月九日　〃五月二日　〃〃月十日　〃〃月三日
〃同月十一日　〃五月四日　〃〃月十三日　〃〃月五日
〃〃月十三日　〃〃月六日

抜ニ世界の志中ニ云ハ例　ヱクワトル赤道之
間氏曰カナリヤのヘツロ島なり遅経度一百
廿度の処にしく赤道抜小へ距る乃
船路へ変に到れば彼同年六月十三日にしく我五月

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

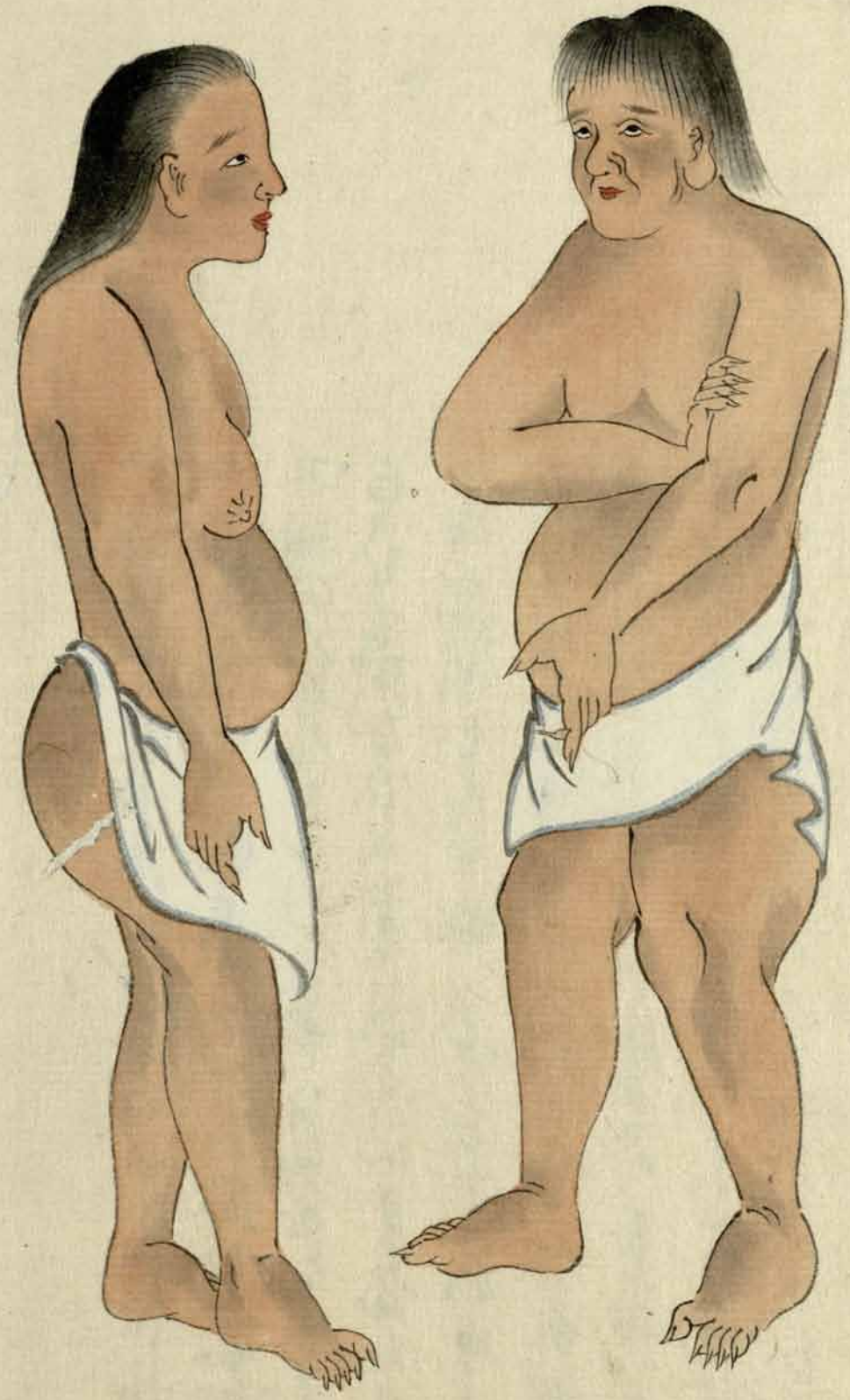
六日ニ歳ヲ一ルケイサを宗帆しく七日めと見
ゆるなり赤原下を西方南へ又南方北へ両回
徑通ぶるのと海彼人といへども稀みれ未
とる日に我東方の人ヨ所望ていふ返しも
開闢千百未曽有の事之

彼六月十四日家五月七日方彼六月廿七日 我五月廿日近十四日の日並合ふ
赤原を過ぐ三七日程をしまて千百里程ゑく サ
ンベイツケといふ大嶋の邊へ船をよれ其嶋を
午未の方へをしまて巡まり嶋の長さ一ルケイサ方
大ひなりと見也 伊豆の大嶋程も所ふ屋きか 嶋中し山も見也但
こゝ山といみへ氣候一ルケイサ同様

覚也豈ハ此高山の根迄舟を寄せ一夜ハ沖へ
おせ望

何故めし私をお入すと私中の人に同へ
りれハ此僧へハ何此訳よくかハランソースケ
の人来望居ましく物理せ思と嘆望ハラン
しスケハ本国へ包抜せ思国なれぞめ母様
の陰禖(ヨニボウ)ゆるかと難平し故ら為かまし
く思ひて上陸せ思といへり
島人ニルケイサ人案と同様乃に来り
の望来まりし時見しに男ハ髪時(ザン)
切(ギリ)おし甚奇怪なる無かなれ前歯

刻板板多里丈ヶ日本人はどもある屋し
女い髪長し窟上の処かし弥却はし
其詠の髪毛志白なる里是い自然なるか又
白キ毛の様付なるか多しかにまた面見球
の皮のめきこの様前へ巻多里形中
の人曰此し雨い日本地へ近く前悔
とも云屋きしとく辰巳の方へかし
なる処なるとく図様出しとく示
なる



ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

嵩人の一船より家財買求め本船へ入れし迄
こゝ外交易のこと所し
地図路海記に採るにサンヘイツケといふ
名なし サントウイク嵩に船をとゞせしと
ミ七名の嵩へ遠ひなる處し其嵩に着せ
ること彼六月廿八日家五月廿八日見へ在
り一ルチイサをお帆しく十五日めへ
漂家等三七日を經くゐるしと覺
し然いゆかし並の内多根へ船を
着しハ地形なるひに度数量を測りこ
る處さ為なる處し 問氏曰此嵩に

往々西洋人海舶の標的となるところなる
也思ふに西墨利加の南海を迫り一ルケ
イサを的としてく西ニ至ル又サントウイク
を的としてく小へ流ル立位を時し我
拜式ハ唐山印度ニ南海へ流ると見なる
なり此度ヲロシヤ人も是にならひてくカミシ
ヤーツカに至ると思ひ此図をヲロシヤ人
乃測量ハ二百二十二度許にて拂京
察人測量になるにてハ此嶋の經度
弐百一十七度許にて相較にあらず
のみかひて拂良察の測量を是と

是ヨロシヤの家長崎の測量に出かけ
ゆるをこそくいふなり

ゆるゆ似たり

此サンヘイツケを出帆し是よりカミシヤーツカ
に向ふ海路を按するにサンヘイツケ彼六月廿八日
我五月廿五日着しまして我義日に發し爲しや
二月廿九日家五月廿二日分以下彼七月十二日我六月七日
近日牧十四日の日原図を日暦を闕く一生義
知る爲かしに漂客等以上所サンヘイツケにハ
牧日滞祖ハせきる根子なれ是此日に日暦
税ならやいなや爲に爲かしに

日牧十四日を以後の日記

彼七月十二日家六月七日以後日暦合し彼

七月廿九日我六月廿四日彼七月三日家六月廿六日彼
八月一日家六月廿六日彼八月二日家六月廿七日彼
八月三日我六月廿八日カミシヤーツカ着岸と見る
日数廿日程をしるを豆之程快晴なく日のひかりを
照す耀な満天の諸星なく多く而二日程なり
但し夜中一程に明星（ホガラカ）高さ何をもしし私中
なも不審に思ひて一度絶望める松子のこのもの
をしに何か子細ある事とみてカベタンなとハ
笑ふて居れり日本十一近な海上になる
そハ小の方へハ水をもしれ日本地をは左
になしく通るとこるいひ多を此海上鴻山の数

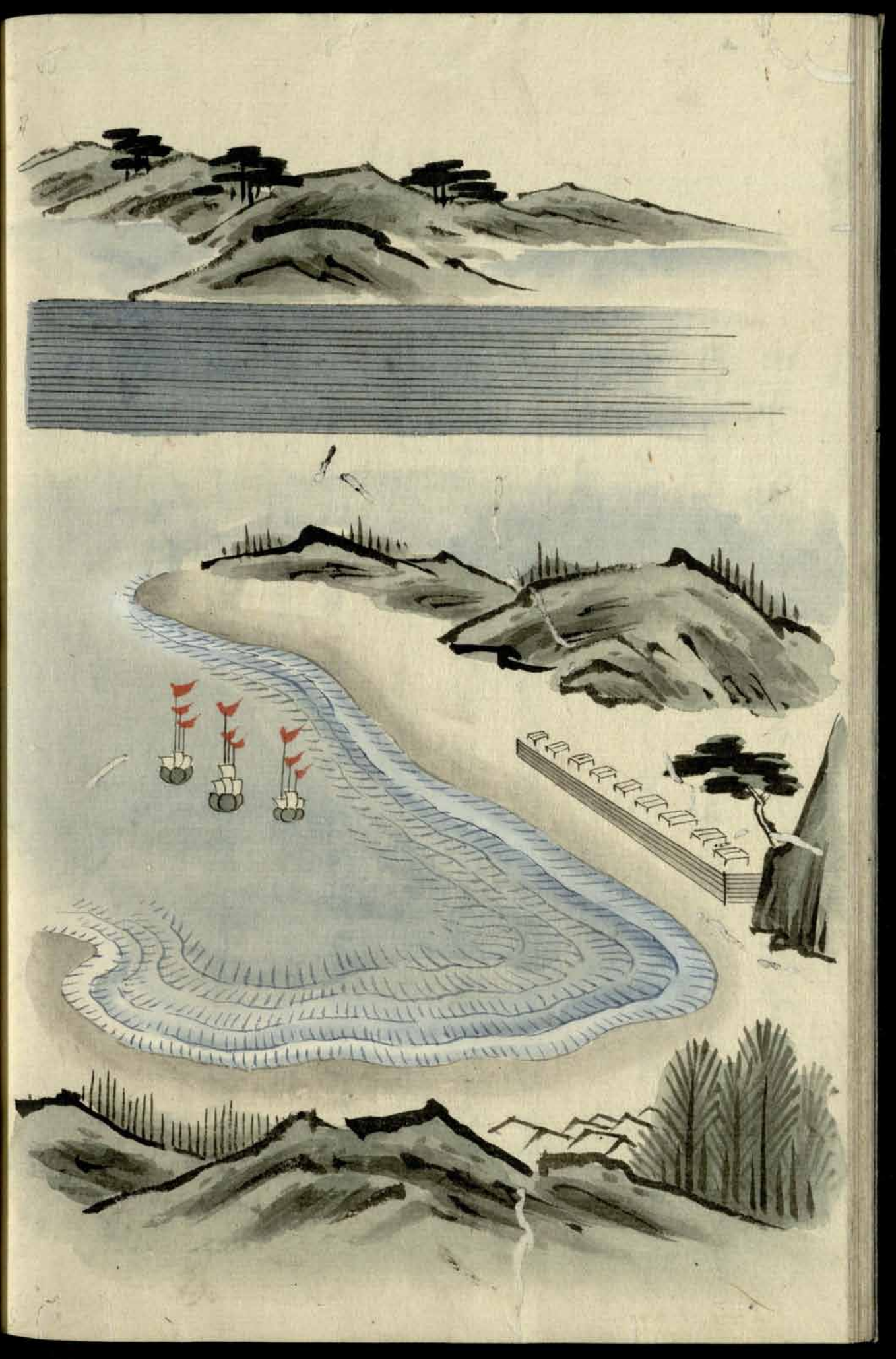
角をくみかけ候カミシヤーツカ〳〵笠ニ私一日
前方山をみかけたり
七月三日カミシヤーツカ笠
海路記を按ゆるに彼八月三日我六月廿八
カミシヤーツカ笠と見ゆ
和解書上ニハ彼暦数一千八百四年九月
三日（当子七月廿九日）カミシヤーツカまいらぬると云ふ
義質　按ニ九月ハ八月の和解の誤ふ
家七月ハ六月の誤ふなる歟
此所魯西亜（ヲロシヤ）所分東北の其境本国より数千
里のたしまく家帳夷地へハ接近し所之ニ私民

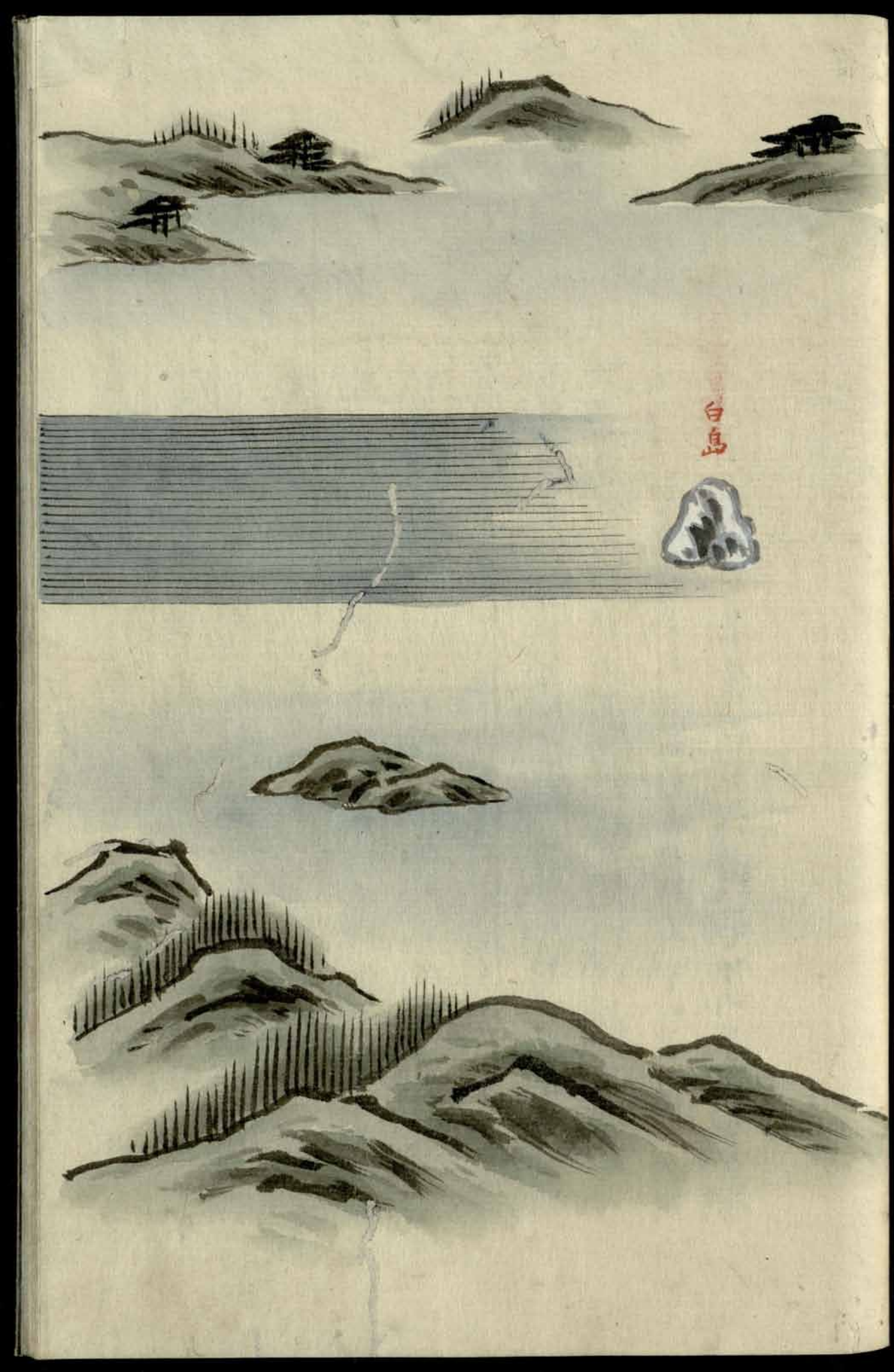
我もし先使節に外京組こ者は所へ始て来
る事なカミシヤーツカヘ若き事とハ知れ是湊
口志れ彼是と私を迫し多事むくもしき繪
図面所まく亀く見合けるう考れまく湊と口
ゝ事無先へ私を書事迫(スグ)し又の事戻し格(ゴウ)
く考れ多事湊無帯をなす所なす湊は揚場
ゝ事金程手間くの中程に丸くし出くこゝ多
小嶺所事 名ハシタローカといひし 格に見る頂に梯(ビニ)十本程所事人無
上事かるしといふこれ多の薫まく悪く白くなすて所る格也
是ゝ事そるかこ海上ゝ事ゝこく湊口目所くと云る
なす志かるに海ゝ事湊をなすなの入口至る世間
く左右高方ゝ事こる山れ侍(ソバダチ)ちなる所こく

をしめ其際近も切り象をもきらに湊口とはみへ
はむ右目前の山詩もこゝきる也へことゝ見えた乃海
岸近景迫し彼里得はしてゝ又其こ我房里
がけに餘程引をなれ海上より湊内の山嵩こ
ゝとも各悦ひ一生通く船をもえよせれハ初
めみつけまる両山其ぞ高てる事ハ云く世間き
とゝろ有里き刈其口より一面我入れりれば内ハ湾
我なし云く廣き湊なり湊の口く入り候こ船す
こゝ切くに其小島ハ家我通船し横に切れ
こゝ湊へ付ハ其間測多く場所なりとくこれ
我をくる様に一面我迫しして是岸せり入口

の所とはいへ八十里行ゆくいふ此所をはバウヲロケ
ガワといふバウヲロケハこと追押派をし中興の
帝王の名を表せしく名付しとガワ無恐く
湊此度をいふ

此湊の名先太夫ハヤーテロガランといふ
湊入まゝ石火矢を放しけれハ湊のものども
見呉船入来りしと云ふ騒動の粕子なりし
るゝ本船へ建る旗幟の記號を見かけ
出(アンド)地此粕子なくなりもなく誌(シヅ)を當船を
出し紫円しく着岸せしむ使者并
上役人上陸ハ




白鳥

人家二十七ハ軒もある屋ーー未造ニ至ラ
簾畧義もあるを
編銷義大竹岡石火矢も湊の海岸ー基上ニ
枚梃備置リ
湊ニ口ニハ百石千石ツミ位の小永まかるをかゝる居
れるを此処ニ〳〵ニヨルと云なるに足悟灰ゆゑる
人を鄭氏カミシヤーーツカ足悟灰人数六百人
まかるをも居ると云皆平田分鄭審氏
ニヨルまでを尾先鄭ゆれば五年も拾人
も語居る上段のことのハ拾人まかるを語ラ居
る拾本ニ足悟ハ諸段不ゆゑとめ達見審

処へも語(ツメ)ると云北斎の時はいつれも糊に出
るなり

土着の人は力ミシヤーシタと云此処ハ他へも往
こく居る(据る)なりと云ていふ土七人見かけ多くも髪脂
ともに黒し　麻の皮にて製る腹は着襟
の処よりも底(カシラ)へ冠る根に志多くものなりと是土地空
囲居の事なりと八月にいふれは雪始りも半
る(ゆ)よりも湊然に非るよし　極寒の苦はオホし
ツカ近千里の雪詠あり車雪(セツシヤ)にて沢の上は通用
ほと云此処もてる多(ナ)く犬ヲ使ひ雪車にて荷物ハ通用
せしむる事オホしツカのめし　夜苦は此仕かけ様見る

夏なきを其時花にはあらせなども達にて其仕かけ波
をせりと為ると圖説ホヲツカの説に詳かなれ是今奥
にウヱリホノ（上と云夏なり云ニハ上ハ手と云夏なり発し）カミシヤーツカ又ニースノ
下（モト）ふこと カミシヤーツカもいふ両処あるとニースノ方ハ
余程ちひさく人家も多くカミシヤーツカ想ふ
とす締の代及も家に在勤ひと云
仮節此処へ立寄しハ土地の様子見分万夏の
とす[illegible]中後し又右に云石火矢等に彼損也
しなども等深にしく捨童やなんと云夏なれ
味し且日本交易の元組のこと云事ハ
此地にあるとす運送ハ屋ホ中台のるひなるとす并に序

に清かせ奥堀夷鴻和所の地なとは表裏の高遠(ヘン)
見屋の多めなりとせ
帰船中廿五六日目に代皮も家に来り侍節
に御会し又此家分別に案組人にも来る若
岸に家に飛脚を立しなし
一日ルといふ皮人其家分高人の里組長湾へ来れり
ミートルイロノーチといふ人とイワンマノイチといふ人
となり足怪ハ六人此所なりの里なり足二
スノカミシヤーツカなり来るなし
桜に右高人の性名ホいふなし
又此所なり上陸せしのしハ画師老人足ハ

私中より病氣有外に産物を喰味し医術
も出来得る事故上陸は是ハ右病人取扱乃
為ゑと共此人の代里に其人別人を入れ
む該飽指南人ハ又上陸せしむ是ハ自ら
役業を為ゑ百年之後法家まくなりし故に
学問
食料の牛も二ヒ三ハ分率せ来るを永く入れ
又途中にて得る所の内永らゑ上しこのも所
里本国へ送らしむる様子なり
此湊より日本之地迄二十一嘗所里といふ其廿一日ハ
日本元第十八日の嘗迄彼所以なりコレイツケと

以上よし此所とも獵師（ラツコ）の上品なるものは獵し
得るよし
第十九日入寄とも二なる事日本人も来り居る
よしの所しなり
右ニ島ニカミシヤーツカとも云ハ折ツて居る友皮私
この事其寄ニの事を一日二日ツてまも居り迫るよし
おしツての遠近ハ何るとも
桜ニ伊勢船子光太夫ハ漂流の島とも云ハ
カミシヤーツカ近の私ニの事ニ地方
へ入り陽路ハオホーツカとも云ハ私し
こ送り届けられしよし

海路記を抄するに此湊當ーたハ三十餘日
りこゝ也

八月五日　カミシヤーツカお私

長崎阿蘭と迎詞とも和解出上ニハ彼ノ
九月十八日家八月七日カミシヤーツカお
私と何ゝ漂流人覚来る所の八月五日
といへども二日ニ遠ひ何ゝ

是より日本長崎迄の海海なり此事より長崎
迄三十日の見語ニ〳〵お私寸日和ニ付れハ三七日に
はれ行ゝて私中の諸役人中なり
日本海海の沖ハ流荒く世界に第一の難場之

日本ニ船ハ二丈の造ヲ方手(テ)後(ヌルキ)ニ在ル故ニ彼船ハ
ニ年ニ多ク(コト)ニ下ニ在ルヲ以テ往ニ往ヒ
通船ニ所ハ地方ニ至ル五百里沖ニ至ル終ニ於ケル
ニ出ル事ニ

撰ハ来る絵図を毎ニ船中ニ見合せ図ニ於し
ける外の論も何事やと水主ニ毎度帆柱の上ニ於
けて遠見をせる事

お船しく問ヒ事ニ於ケ此ハ蝦夷沖ニ至ルといひま
ニ至ル志いしくもしく此通ニ仙基(サンデウ)你等の古々ニ至
とく絵図面出用ニ至ひしニ家ニ指示(シメシ)し
ニ至ル又そ出し我も通ニ於けし事ニ日本の

の都城江戸の節に所為る又志ぞしく行こく此あ
てに無嘗七ツ所を其中に八丈といふ島所を你尓此
辺を都らさる處しといふめけ毎日本地の根子
中せしも二番相とりて同地方角ハ志ぶ所事有
さしに合点ゆき兼る所こても志ぶれと言へれハ
織物乃有る八丈島を志ぶ思と無りしから思
事なりといひ其を八月九十二日と言へ
山ゑへれ無彼所薩ニ人なりといふ此沖に
見為るハ琉球なり今通る所ハ琉球と薩
ニ人の者なり各こ志れりやといふ此邊ほゐに通
永志する事なりしことなり志ぶれと言へ

りれハ我国門の出と志られしハ無なるも油断の出
となるを嘲笑さるり 月廿八日以薩二ノ近く一船
をよせりしかハ此若大志けるく地方へ向ふ志る
かひ波浪至くなく舟へ波をかぶ辺ニ使節
の船底へも汐乃至く 獨きなるに為里上樹
に重さる荷物もそくく思れ損する程故一船
も余程いさゝさる里 八月廿日の大荒にて袖の猪子陸子
近大なるにて打崩しさるとの噂ハ
此時の出と
なる事し 彼国の一船ハ門へ該の延年故を里汐乃
打出ニ為るハ左の一船を為に遠る故有意く其
所合なかれ為く望の一船底へハ多いに思相と
志さるものへ然とも洩れていハ又出ゆく志る里

しき孫之外哀恐しく此辺にくらひこれ
写とも是迄嘗なき難変とこそ有くやさも
なに私ことに留り居し我見付しまや向地のおき
きらく篝火をあらはせ使者是を見て薩
ニ地にくかくもをきくなれハ我ことに到し
事は皆し着岸而く長崎近に私ニ入るまと
我知り居る所しといへり
向ニ至る山まへりれハ半月所りの嘗しく是
を測りまも是肥前国温泉ノ嶽なり
按ニ此嘗ハオクタンー又イスタラヒなと
以測量嘗なる所し

薩二ノの志満くの裡にタナゴし満といふ所ありて何(イヅ)
れのかゝる事と使者向きるに我等い満を知る
地方さらに知られと答へりれは誠に你等は能く
に心をさきものなり我境内の事を知られといふ
をいふれをしひりり

タナコ島は種ヶ島の事と学也案ず
種ヶ島と称する本名なり屋(ヲ)今は種ヶ
島といひなれよし彼は旧名を傳学せ
と云也

羅(ホーハリ)計初は巳年とせしを堀貴地の沖といひ
し所とも聞くもしをまゝ申酉又酉戌迄

もしましゝ如く薩二人の山をなんかけたり
此船中ハ一日ニ南なりて海を言ふなり

環海異聞巻之拾三 終

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM